

感謝の記念碑

ゝ医は仁なりゝ

浅羽佐喜太郎



写真の人を知っていますか？もしかすると知っているという人はあまり多くはないかもしれません。この男性は名前を浅羽佐喜太郎と言います。一八六七年に磐田郡東浅羽村（現在の袋井市梅山）に生まれ、神奈川県で医師をしていました。佐喜太郎は、大変な名医でしたが、困っている人や貧しい人からお金をもらうことはしませんでした。その浅羽佐喜太郎の名前を今年になって、新聞やテレビでよく見聞きします。

その理由は、同じアジアの国であるベトナムが大きく関係しているのです。

話は、一〇〇年以上昔にさかのぼります。当時、ベトナムはフランスの植民地でした。植民地とは他の国に領土を占領され、政治や経済を支配されてしまうことです。そのため、多くのベトナムの人々は重い税金や重労働に苦しんでいました。このままでは、ベトナムに未来はないと、フランスからの独立を目指した一人の青年がいました。その青年の名前をファン・ボー・チャウと言います。

ファンは、「武力では、独立はできない。大切なのは、自分たちの国の未来を思う若者を育てることだ。」と考え、多くの若者とともに、日本を訪れました。当時の日本は大国のロシアとも肩を並べるほどの国に成長しつつありました。日本ならば、ベトナムがフランスから独立できるために、何が必要かを教えてくれるだろうと考えたのです。ファンをはじめとする多くの若者は独立を夢見て、日本で多くのことを学びました。しかし、フランスがだまっていなかったのです。ベトナムの若者を日本から追い出すよう日本に圧力をかけてきたのです。日本政府はフランスに逆らうことはできず、やむなくベトナムの若者たちを国外へ追い出しました。そうしないとフランスと戦争になり、日本もフランスの植民地になるおそれがあったのです。困ったのがファンをはじめとするベトナムの若者たちでした。帰るためのお金もなく、この異国の地で死んでいくのだと絶望していました。

この話を聞き、救いの手を差し伸べたのが佐喜太郎でした。佐喜太郎にとって、困っている人に日本人もベトナム人もなかったのです。佐喜太郎はファンたちに生活の場を与え、一枚の封筒を渡しました。その中には、手紙とともに一七〇〇円という大金が入っていたのです。当時、東浅羽村小学校の校長先生の一ヶ月の給料が一八円でしたから、どれだけ大金であったかが分かります。

ファンたちは、いつの日かこの恩を返すことを約束して、日本を出国しました。しかし、二年後に佐喜太郎は病気で死んでしまったのです。このことを知ったファンはとても悲しみました。そして、命の危険があるにもかかわらず、偽名（にせの名前）を使って日本を再び訪れました。訪れた地は、佐喜太郎が生まれた袋井市浅羽村でした。ファンは佐喜太郎への感謝の気持ちを石碑に刻み、村人と協力して常林寺に記念碑を建設したので



す。

その後、ベトナムは独立を果たし、日本とも結びつきが強い国となりましたが、その第一歩は「医は仁なり（医は人々を思いやる心である）」という佐喜太郎の熱い思いから始まったのでした。

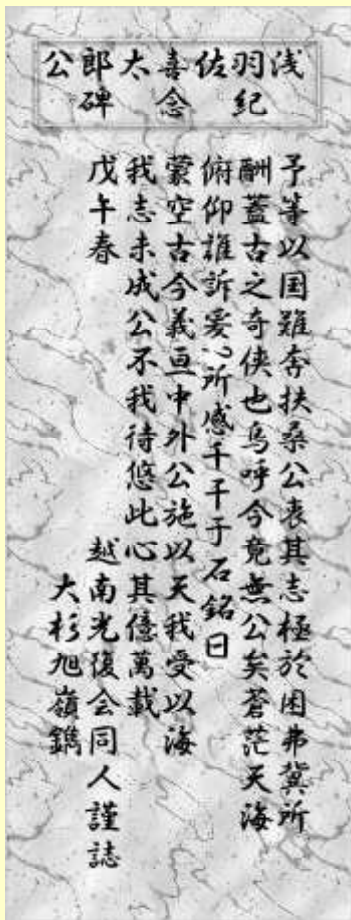
浅羽佐喜太郎について

- 一八六七 磐田郡東浅羽村 現在の袋井市梅山）に生まれる。
- 一九〇五 ベトナムの独立を目指したファン・ボイ・チャウが日本を訪れる。
- 一九〇八 助けを求めてきたファン・ボイ・チャウに七〇〇円を渡す。
- 一九一〇 病気のため四三才で死去する。
- 一九二三 佐喜太郎の意志を受けついだ家族が、洪水の被害にあった東浅羽村に義援金を届ける。
- 一九一八 佐喜太郎の死を知ったファン・ボイ・チャウが東浅羽村を訪れ、常林寺に感謝の記念碑を村人と協力して建設する。
- 一九四五 ベトナムが独立する。
- 一九七三 ベトナムと日本の国交が樹立する。
- 二〇二三 ベトナムと日本の国交樹立四〇周年を迎える。



【今も残る常林寺の記念碑】

常林寺の記念碑



要約

私たちはベトナム独立のため日本に来了。佐喜太郎は私たちの志に無償の援助をしてくださった。これほどの方がいるだろうか。その佐喜太郎は今やこの世にいないという。この感謝の気持ちをもどるように、だれに伝えたいのだろうか。